

タルカッタ女史に関する文献別索引(二)

凡 例

- ☆ 以下は、「学院史料」第4号に収録した、神戸女学院の創立者イライザ・タルカッタ女史に関する文献別索引の後篇である。
- ☆ 本稿では、今次大戦後に刊行された神戸女学院関係文書より、「めぐみ」1948～1986, 「神戸女学院学報」1956～1986, 及び学院史——“The History of Kobe College,” 1950, 「神戸女学院八十年史」1955, 「神戸女学院 百年史 総説」1976, 「神戸女学院百年史 各論」1981——をとり扱う。
- ☆ 「めぐみ」及び「神戸女学院学報」の項におけるリストの構成は、左端より、号数、発行年月日、タルカッタ女史の名の出ている頁、その記事名——となる。学院史の項においては、章、節、小見出し、タルカッタ女史の名の出ている頁(単位数なしのアラビア数字)を、それぞれの書物の様式に応じて羅列している。
- ☆ 本リスト中*を附した記事は、神戸女学院創立百周年記念建築物の一つとして1979年に竣工した「エライザ・タルカッタ記念館」に言及するものである。

第Ⅱ部 神戸女学院関係(後篇)

Ⅰ 『めぐみ』(2)

- 32 1948/ 9 2頁 渡米に際して(畠中 博)
13頁 寄宿舎便り—就任の御挨拶と寮の近状(舎監 松山初子)
- 34 1951/ 3 8頁 アメリカから四名の代表者を迎えて 創立七十五周年記念諸行事
- 35 1955/12 9頁 創立八十周年記念式辞(難波紋吉)
14頁 神戸女学院の発展とその支持者(畠中 博)¹⁾
- 37 1956/10 20頁 女学院だより—創立者記念日
41頁 支部便り—ニューヨーク支部(鴨井弥生)
- 39 1957/10 18頁 各種行事・五月²⁾
- 40 1958/ 7 40頁 卒業三十五周年記念クラス会(河島幸子)
- 42 1959/ 7 巻頭 (写真) 大学祭第四日目—タルカッタ先生の墓前で 神戸春日野墓地
38頁 イースターの日に山田チャブレンへお便り(三井たま)
54頁 行事・五月二十二日³⁾。/大学祭第四日
56頁 タルカッタ先生記念奨学金⁴⁾
- 43 1960/ 4 2頁 宣教百年に当り、母校神戸女学院に感謝の思いを捧げる(西原 恵)

- 44 1960/11 24頁 デフォレスト先生御安着を報ず (堀 艶)
52頁 八十五周年記念第三回めぐみ会
- 45 1961/ 6 巻頭 創立者記念日に (写真)
同上 創立者タルカット女史のお墓移転 (田村富美子)
4頁 同窓会理事会議事録抄・一月十二日
- 46 1961/11 3頁 創立記念日のガーデン・パーティ
7頁 同窓会理事会議事録抄・五月十一日, 六月八日
- 47 1962/ 6 巻頭 (写真) 完成された 故タルカット先生の墓前にて
16頁 第三回世界教会協議会に出席して (野本益世)
25頁 同窓会理事会議事録抄・三月二十九日
- 48 1962/12 12頁 会員訪問記 三井たま姉, 吉田其枝姉
17頁 支部だより一神奈川支部から 募金
- 51 1964/ 7 巻頭 (写真) 美しい花に埋まったタルカット先生の墓前
- 52 1964/12 28頁 同窓会理事会議事録抄・四月三十日
- 53 1965/ 7 巻頭 (写真) タルカット先生のお墓を囲んで
- 54 1965/12 9-10頁 創立90周年特集一(写真) 神戸ホーム時代(明治初年頃)⁵⁾。 /人力
車上のタルカット先生。 /英和女学校時代(明治初年頃)⁶⁾
26頁 「めぐみ会」でのインタビュー 中村奈良栄姉, 塩見のぶ姉, 佐々城
きく姉
32頁 めぐみ会
- 55 1966/11 巻頭 (写真) タルカット先生のお墓まいり
4頁 学長就任挨拶 (和島芳男)
7頁 中高部長就任挨拶 (勝部庫三)
22頁 記念碑に憶う (原 忠明)⁷⁾
- 56 1967/12 巻頭 (写真) タルカット先生のお墓まいり
- 57 1968/12 巻頭 (写真) タルカット先生のお墓まいり
31頁 卒業40周年に際して (芝みどり, 山岡八千代)
- 58 1969/12 巻頭 (写真) タルカット先生のお墓まいり⁸⁾
11頁 守株と造反のはざま (溝口靖夫)
- 59 1970/12 53頁 支部だより一東京支部
- 63 1974/10 2頁 こんにちは さようなら (丹部トモ)*
61頁 クラス会だより一墓参二十周年同窓会 (阿部利江)
- 64 1975/ 9 9頁 創立百周年記念行事概要
23頁 教会だより一神戸教会のこと (湯口 恵)⁹⁾
26頁 昭和四十九年度定時総会及び懇親会 (阪西まち子)
58頁 先輩のおたより (塩見のぶ)¹⁰⁾
- 67 1978/ 7 26頁 昭和五十二年度定時総会及び懇親会 (石川美知子)
37頁 中高部だより (加藤民雄)
- 69 1980/ 7 巻頭 (写真) 新しく建った中高部タルカット館*
35頁 先輩のおたより (山田巴未)*

- 71 1982/ 7 13頁 教会だより一福岡警固教会 (和栗静子)¹¹⁾
- 72 1983/ 7 巻頭 (写真) 移転以後に建てられた主な建物*
- 8頁 岡田山移転五十年一はじめに
- 10頁 同上一新校舎 総務館
- 13頁 同上一そして今*
- 73 1984/ 7 8頁 御退職の方がた一ながき年月きのうの如く (瀬戸良三)*
- 74 1985/ 7 4-5頁 創立の師イライザ・タルカット女史一生誕百五十年にちなんで¹²⁾
- 4頁 (肖像画写真) Miss Eliza Talcott
- 5-7頁 恩師との出会い 百一歳に想う (吉田其枝)
- 6頁 (写真) 神戸女子神学校にて (明治41年4月)
- 7頁 (写真) 明治41年3月神戸女学院高等科卒業後一学期間神戸女子神学校音楽教師として勤務せし時の記念写真
- 13頁 中高部の現状 (加藤民雄)*
- 37頁 鳥取県浦富海岸のサマー・キャンプ (渡辺久雄)
- 68頁 編集後記 (佐藤)
- 75 1986/ 7 巻頭 (写真) 創立者タルカット先生生誕150年記念墓参
- 38頁 創立者記念日と創立記念日 (渡辺久雄)
- 55頁 神戸女学院高等学部卒業記念寄付金会計報告 (河野有宏)*
- (栗木 順子)

Ⅱ 「神戸女学院学報」

- 1 1956/ 3 2頁 創立八十周年記念式概況¹⁾
- 2 1956/12 1頁 神戸女学院に着任して (元ロックフォード大学長, コウベ・カレッジ・コーポレーション理事エム・エイ・チャーク)
- 4 1957/ 7 1頁 イライザ・タルカット (リーズ・ギュリック)²⁾
- 同上 (写真) 花に囲まれたタルカット先生の御墓
- 7 1958/ 6 1頁 創立者記念日を迎えて (難波紋吉)³⁾
- 同上 (写真) 写真中央が創立者タルカット先生
- 同上 イライザ・タルカット (フランク・ケーリ)⁴⁾
- 9 1959/ 3 1頁 宣教百年と本学院 (和島芳男)⁵⁾
- 10 1959/ 7 1頁 ジュリア・ダッドレイ先生を語る (リーズ・ギュリック)⁶⁾
- 13 1960/ 7 1頁 八十五周年創立者記念礼拝 “松明を高くかかげよ” (アンジー・クルウ)⁷⁾
- 1頁 (写真) 創立当時の神戸女学院の先生と生徒たち
- 2頁 日米修好通商百年記念展出品⁸⁾
- 14 1960/12 1頁 (創立85周年記念式) 祝辞 (関西学院院长 小宮 孝)
- 2頁 表彰一日米修好通商百年記念委員会
- 16 1961/ 7 1頁 神戸女学院創立者タルカット先生のご精神 (畠中理事長)⁹⁾

- 同上 (写真) タルカッ先生墓前礼拝
- 17 1961/12 1頁 The 86th Anniversary (Roy Smith)
2頁 大澤幸恵夫人のことども (難波紋吉)
- 18 1962/ 3 2頁 第三回世界教会協議会に出席して (野本益世)
- 19 1962/ 7 1頁 タルカッ先生の新墓地完成
同上 (写真) (肖像と墓地)
同上 Let Your Light Shine. (May M. Roberts)
- 22 1963/ 7 1頁 創立者記念日 Downs 先生の式辞 (Downs)¹⁰⁾
- 23 1963/12 1頁 福音信仰に望まれること—チャプレン就任の辞に代えて—
(溝口靖夫)
- 25 1964/ 7 1頁 暗黒の国に福音の光を一創立者記念日によせて—(難波紋吉)¹¹⁾
- 27 1965/ 3 2頁 昭和四十年学院年間標語 (溝口靖夫)
- 29 1965/12 2頁 カズノコ (高道 基)
3頁 創立九十周年に思う (丹部トモ)
- 31 1966/ 7 1頁 学長就任の辞 (和島芳男)¹²⁾
同上 就任の辞 (勝部庫三)
2頁 神戸女学院創設の地に記念碑を (原 忠明)
同上 (写真) 記念碑
3頁 タルカッ先生と石井十次 (溝口靖夫)
- 34 1967/ 6 5頁 タルカッ先生のお墓に詣でて (勝部庫三)
- 40 1969/ 7 4頁 創立者記念式式辞 (吉田ひろ)¹³⁾
- 43 1970/ 7 1頁 美は学園にふさわしく一百周年をめざして—(有賀鐵太郎)¹⁴⁾
2頁 岡田山の現実 (和島芳男)
- 45 1971/ 3 1頁 歩いてゆこう (有賀鐵太郎)
- 47 1971/12 4頁 来日直前のタルカッ, ダドレー両女史 (鈴木雅也)¹⁵⁾
- 48 1972/ 3 3頁 岡田山回顧 (武田寅雄)
4頁 タルカッ, ダドレー両女史の日本の初印象—アメリカン・ボード
日本布教報告書による—(鈴木雅也)
同上 (写真) タルカッ女史。 /タルカッ書簡1874年5月16日附末尾
- 49 1972/ 7 1頁 ボガード先生植樹式に寄贈¹⁶⁾
- 51 1973/ 3 1頁 K. F. ベリー女史と銀杏の樹 (酒井)¹⁷⁾
- 52 1973/ 7 1頁 女学院タイプ (新理事長 原 清)¹⁸⁾
6頁 教科の窓 (久保田栄)
- 53 1973/12 5頁 デフォレスト女史誕生の頃 (鈴木雅也)
- 55 1974/ 8 1頁 新しい女性教育の種を播く人 学院創立者タルカッ先生
(溝口靖夫)¹⁹⁾
6頁 中高部報 J. 1 キャンプ報告
- 56 1975/ 3 3頁 百周年記念募金について (院長 小宮 孝)
- 57 1975/ 9 1頁 婦人による婦人学級—建学百年の歴史を噛みしめよう—(原 清)²⁰⁾
2頁 百周年記念館について (岡本学長)*

- 3頁 墓前礼拝
 4頁 新任先生のご紹介 (岡田藤太郎)
 58 1975/12 1頁 (創立百周年記念式) 式辞 (小宮 孝)²¹⁾
 3頁 祝辞 (大木金次郎)²²⁾
 4頁 Greetings to Kobe College as it Celebrates its Centennial (May M. Roberts)
 10頁 創立百周年とは (大学自治会長 友恵裕子)
 同上 自由の意味 (高等学部代議員議長 谷口陽美)
 60 1976/ 9 3頁 奨学金制度の現状 (小玉佐智子)
 62 1977/ 7 6頁 院長・学長就任式 祝辞 (辻橋三郎)
 同上 愛校バザー原点に帰る (八田光生)
 65 1978/ 8 1頁 神戸女学院大学 ―その来し方, 行く末 (八木一文)
 4頁 中高部の将来計画 (松本寛二)*
 6頁 「岡田山キャンパスの建築計画」…その現状と課題…(伊藤卓二)*
 17頁 宗教講話「あなたはどこにいるのか」(東京女子大学教授 小川圭治, 文責・高道 基)
 18頁 愛校バザー開催される (八田光生)
 28頁 環境保全委員会報告 (瀬戸良三)*
 66 1979/ 1 11頁 オルチン文庫の覆刻出版について (鈴木恒彌)
 67 1979/ 3 1, 2頁 卒業生のみなさまへ (岡本道雄)
 2頁次 タルカット像 (小磯良平画伯による) のカラー写真
 68 1979/ 7 4頁 愛神愛隣によせて (松本寛二)
 69 1979/12 1-3頁 神戸女学院百周年記念「エライザ・タルカット記念館」竣工 (加藤民雄)*
 70 1980/ 3 6頁 退任のことば―感謝と共に―(渡辺苑子)*
 72 1980/12 7頁 環境保全委員会報告 (前多 純)*
 74 1981/ 7 16頁 環境保全委員会報告 (大川 徹)*
 75 1981/12 19頁 学院だより 学内諸設備改修の現況と将来計画の概要 (千葉朝春)*
 77 1982/ 9 26頁 近年の志願者動向について (八田光生)
 80 1983/ 7 1頁 姉妹校ロックフォード・カレッジを訪問して (岡本道雄)
 20頁 中高部報告 中高部海外帰国生コンサルテーション (松本文男)
 21頁 同上 J. 1墓参 (原田恵子)
 同上 プラネタリウム設置について*
 82 1984/ 3 3頁 学院だより 岡田山キャンパス50周年記念事業について (藤森 元)
 21頁 最高齢の同窓生を訪ねて (岡本道雄)
 83 1984/ 9 6頁 記念奨学金制度について 記念奨学金一覧表
 28頁 中高部報告 高等学部第101回卒業生記念植樹 (船橋 昭)*
 同上 同上 J. 1墓参 (鳥居泰子)
 29頁 同上 第5回 帰国生コンサルテーション (松本文男)
 30頁 学院日誌 5月22日(火)創立者記念日墓参

- 84 1985/ 3 28頁 中高部報告 文化祭 (小川英紀)*
 31頁 同上 消防訓練*
- 85 1985/ 7 18頁 中高部報告 J. 1 墓参 (原田恵子)
 22頁 学院日誌 5月22日(水)創立者記念日墓参
- 87 1986/ 3 18頁 大学研究所報告 講演会「神戸女学院の健康教育を考える」
 (内藤純子)
- 88 1986/ 9 2頁 神戸女学院と私一学長就任のあいさつー (山口光朔)
 9頁 1986年度記念奨学金授与について
 21頁 中高部報告 J. 1 墓参 (久保田栄)

(栗木 順子)

Ⅲ 学 院 史

a) The History of Kobe College

Chapter I. Beginnings.

- The Pioneer Women Arrive. 1 (左¹⁾, 右), 2 (左², 右).
 They Start a Day School. 2 (右³⁾, 3 (左⁴).
 They Plan a Boarding School. 3 (右⁵).
 The WBMI Assumes Responsibility. 4 (左⁶), 5 (左, 右⁷), 6 (左⁸).

Chapter II. The "Kobe Home".

- The Boarding School Opens. 8 (右), 9 (左⁹, 右¹⁰), 10 (左¹¹).
 It Expands into a Second Building. 10 (右), 11 (左¹²).
 Differences of Opinion Arise.¹³⁾ 12 (右).
 The Pioneer Women Leave. 13 (左¹⁴, 右).

Chapter III. The Kobe Girls' School.

- A Curriculum is Organized.¹⁵⁾ 14 (左, 右).
 Miss Talcott Returns for an Interregnum.¹⁶⁾ 18 (左, 右).
 Miss Brown and Miss Searle Arrive. 19 (左, 右), 20 (左).

Chapter IV. The School in the Latter Eighties.

- Christianity Spreads in Japan. 22 (右¹⁷).
 The Mission Considers Moving the School. 24 (左).
 Teachers Come and Go. 28 bis (photo).

Chapter VI. Introductory Survey.

- Summary of Progress. 37 (左).

Chapter X. The Plant.

- The First Suburban Venture: Okuradani. 90 (左).
 The Ultimate Campus: Okadayama. 97 (右), 100 (右).

Equipment.	106 (左).
Chapter XI. Funds and Finances.	109 (左).
Chapter XII. Educational Policies.	
Program of Instruction ; II. The College Department.	135 (左 ¹⁸).
Practice and Projects.	137 (右 ¹⁹), 138 (左 ²⁰).
Chapter XIII. The Personnel.	
Individual Mention.	148 (右).
Chapter XVI. The War Years - 1941-5.	
Acceleration of Courses.	178 (左 ²¹).
Chapter XVIII. A Survey of the Product.	
The Rank and File at Home.	220 (右).
Appendix.	
I. Brief Chronology of Kobe College.	i (左 ²²).
II. (a) Administrative Heads of Kobe College.	iii (右).
XI. Miss Searle's Chronological List of Residents in the Nansha, 1875-1933.	
xxvi (左).	

(川村慶子, 吉年ユウ子)

b) 『神戸女学院八十年史』

総説 八十年史の概観, (→) ¹⁾	1, 2, 3, 4.
第一章 維持管理, 第一節 学校設立, (→)	15, 16, 17, 18, 19, 21.
	(⇒) 28, 29, 31, 32bis(写真), 33.
第二章 教育方針, 第一節 一般方策, (→)	81, 82, 83, 84.
第二節 宗教教育, (→)	104.
	(⇒ ²⁾ 119, 120, 122.
	(⇒) 127.
第三章 学校組織, 第一節 創設期, (→) ³⁾	153, 154, 155.
第三節 改革期, (⇒)	203.
第四章 敷地建物, 第一節 山本通, (→)	205, 207, 208, 210.
第三節 岡田山, (⇒)	260.
第五章 学院生活, 第一節 学院風俗, (→)	272.
第二節 学生団体, (→)	290.
	(⇒) 292, 296bis(写真・明治時代の生徒風俗).
第三節 学院と社会, (→)	306, 307.
	(⇒) 317.
附録, 一, 八十年史年表 ⁴⁾	322, 323, 326.

(川村慶子, 大野多佳子)

c)『神戸女学院百年史 総説』

第一章 草創の時代

第一節 米国伝道会の日本伝道

市川榮之助の逮捕・獄死 12.

禁令解除と伝道団の態度 15.

第二節 私塾の創設

タルカット, ダッドレー両女史の来日 16, 17, 18.

両女史神戸到着¹⁾ 19, 20.

私塾「女学校」 20, 21.

教育と伝道の両立 22, 24.

第三節 開校前夜

兵庫伝道 25.

三田伝道 26, 28, 29.

国家権力の黒い影 30, 31.

寄宿学校設立への動き 32, 33, 34.

〔注〕 37.

第二章 創業の時代

第一節 「女学校」開校

建築にあたって 41.

校舎完成 42.

米国伝道会宛開校報告史料²⁾ 43, 44.

「女学校」の初め 44, 45, 46.

創立当初の学校名 46, 47, 48.

教科内容の変遷 48, 50.

第二校舎の建築 51.

バロウズ女史 53, 54.

クラークソン女史 55.

第二節 クラークソン女史の改革

「女学校」の景況 56, 57.

クラークソン女史の焦慮 59.

校務責任の委譲 59, 60, 61.

先任者去る 61.

校名改称 64.

第三節 タルカット女史帰任³⁾ 71, 72 (写真), 73.

〔注〕 74.

第三章 試練の時代 ―国家主義と宗教教育―

第一節 ブラウン, ソール両女史の来任 高等科の設置

初期の学校改革 79, 80.

第三節 学校名の改称 ソール院長代理の持久策

	創立二十周年	102.
第四章	充実の時代 ―ソール院長による内面的充実の時代―	
第二節	学院の経済, 同窓会の貢献	
	学院の財政	129.
	学科目の維持	130.
第三節	宗教教育と学院生活	
	創立者記念日	141, 142.
	女学院風俗	146.
	文化的諸団体	148.
	〔注〕	150.
第六章	受難の時代	
第一節	岡田山の新校舎, 二 学校組織と教授陣・生徒の活動	
	校内活動 ^㉑	207.
第二節	戦争前夜の岡田山	
	愛校週	238.
第七章	復興の時代	
第六節	学院の歩み	
	七十五周年記念	316.
第八章	拡充の時代	
第五節	同窓生の貢献	
	会員訪問	376.
第九章	学院の現状	
第二節	全学組織	
	図書館 ^㉒	417.
	史料室	418.
第五節	その他の諸組織と諸施設	
	後援会 ^㉓	452.
付録	神戸女学院略年表	472, 473, 476.
巻末	図・表・写真目次	2, 3, 4.

(川村慶子, 大野多佳子)

d) 『神戸女学院百年史 各論』

第一部

近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院 ―神戸女学院精神風土史論考―

第一章 キリスト教の日本への伝達

一 宣教史的背景

ピューリタニズムと神戸女学院^㉔ 6, 8.

三 地域的限定

	神戸伝道の開始	15.
	〔注〕	17.
第二章	キリスト教の受容	
	二 地域的乃至社会・文化史的背景	
	神戸を中心とする三ルート	21, 22.
	(一) 神戸の基点	
	宇治野村の英語学校	30.
	(二) 三田ルート	
	赤心社—鈴木 清と澤 茂吉	42.
	前田兵藏, 白洲退藏	45.
	(三) 京阪ルート	
	ギューリック, 關唯左右らの活動	49.
	澤山保羅	52, 53, 54, 56.
	福音の潮のUターン	58.
	(四) 山陽ルート	
	タルカット, ダッドレーの活躍	59, 60, 62.
	岡山への展開	63.
	石井十次の児童福祉事業とタルカット	64, 65, 66.
	高梁における先駆者たちの歩み	66.
第三章	キリスト教教育の展開と神戸女学院	
	一 山本通タイプ	
	タルカット, ダッドレーのパーソナリティ ²⁾	79, 80, 82, 83.
	その後の教育者たち	83, 84.
	甲賀ふじと幼児教育	86.
	山本通時代の宗教教育	88.
	〔注〕	120.
	あとがき	128, 129.

タルカット女史正伝のための試み³⁾
131～141, 143～147.

近代日本の女子教育と神戸女学院　— 婦人宣教師の教育活動とその影響について —

第一章　ミッションスクールとしての神戸女学院の創設とわが国近代女子教育の展開

一　関西最古のミッション・スクール

近代女子教育の先駆　151.

日本人の協力者　153.

二　女子ミッション・スクールの教育史的意義

女子教育界への新風　157.

- 女性観の革命 159.
- 三 ミッション・スクールの教育理念
伝道が目的⁴⁾ 166, 167.
最初教育改革 178.
〔注〕 183.
- 第二章 神戸女学院におけるカレッジ開設の目的と初期卒業生たち
- 三 神戸女学院の初期卒業生たち
学院の生み出した人間像 206.
キリスト教女学校の教師たち 235, 236.
- 第三章 神戸女学院のルーツと婦人宣教師たち
- 二 欧化主義から国家主義へ —ミッション・スクールへの批判—
「西洋かぶれ」批判と神戸女学院 266.
〔注〕 275.
- 第四章 デフォレスト院長とその時代
- 二 キャンパス移転及びハイスクール、カレッジ分離の問題
『新築記念帖』から 298.
〔注〕 349.
- 〈附録Ⅱ〉 草創期神戸女学院の精神的基盤・試論 363, 364, 366, 370.

近代日本プロテスタント史と神戸女学院 —三つの問題を中心として—
はじめに 397.

第二部

神戸女学院の英語教育

- 一 普通部・高等女学部・中高部, (→) 422, 424.

第三部

神戸女学院と近代詩歌

- 二 学院詩歌百年の歩み
(→) 前期(明治・大正の五〇年)
浪漫期・象徴期と薄田泣菫 664, 665.
〔注〕 676.

神戸女学院年表⁵⁾ 689, 690, 691, 692, 694, 698.

巻末 表・写真目次 1, 2.

(覚道光子, 佐伯 睦)

『めぐみ』

☆ 同窓会による『めぐみ』の刊行は昭和12年12月発行の31号をもって一時途絶えたが、終戦後の昭和23年(1948)9月に復活。再刊第1号は昭和12年12月の号に続くものということで32号として世に問われた。その後1949年に33号と号外、1951年に34号、それから4年9か月後の1955年12月に35号の発刊を見、以後はほぼ1年に2回発行されていたが、55号(1966)からは年刊となって今日に至っている。

- 1) トルカットとある。
- 2) 基前祈祷会は墓前祈禱会の誤植。
- 3) この日の講演を担当したギューリック教授とは、リーズ・ギューリック (Leads Gulick) で(『神戸女学院学報』10号。4号も併照。), この人の母カーラ (S. L. ギューリック夫人 Cara Fisher) がタルカット女史の姉の娘(つまり姪)である。
- 4) 「タルカット先生の令姪 Mrs. Jracy Richards」とあるのは、J. T. リチャーズ夫人グレイス (Grace Fisher) のことか。
- 5) 名は記載されていないが、三人の外国婦人のうち向かって左端が女史である。
- 6) 同じく名の記載がないが、帽子をかぶっているのが女史である。
- 7) 「神戸ホーム」なる名称については、『神戸女学院百年史 総説』pp. 46-48. 及び同『各論』pp. 3-4. 参照。
- 8) カルカットとある。誤植である。
- 9) 敷地の件に関しては『兵庫縣八郡郡地誌』の「雑居」の項に「米國人アダムス山本通り四丁目第六拾番地貳千百貳拾五坪人民私有ノ地ヲ借り明治八年三月三十日ヨリ貳拾五箇年ヲ期トシ洋教女教師ヲ延キ女學校ヲ設置ス」という記事が見られた(p. 57.)。アダムスとは米国伝道会大

阪駐在医療宣教師 A. H. Adams のことか。

「神戸ホーム」に関しては、前記註7)に同じ。

「ダッドレー・タルカット」は「ダッドレー、タルカット」

- 10) 坐古愛子は座古愛子。
- 11) 「院長タルカット」とある。タルカット女史在任中の学校は神戸女学院とは称していなかったから、「初代校長タルカット」と言うのが普通である。但し院長職在任者を通算してかぞえ「第〇代」と言う時には、タルカット、クラークソン両校長も数に入っている。
- 12) 年齢は全て数え年になっている。

「神戸女学院学報」

☆ 1956年創刊。学報編集委員会(法人、大学、中高部からそれぞれ数名が依嘱されて構成)の手により年三回(夏、暮、年度末)発行。

- 1) タルコットとある。
- 2) リーズ・ギューリックについては、本項『めぐみ』註3)参照。

なお、来日当時タルカット女史は36歳と10か月であった。

- 3) タルカット女史の乗った船が神戸に着いたのは3月31日で、4月12日は女史がボストン本部のクラーク博士宛てに日本からの第一信を認めた日である。おそらく *The History of Kobe College*, p. 2. の読み違いであろう。

「大阪に居住」は「神戸に」。「白洲退造」は「退蔵」。

また、A. E. ギューリックは O. H. ギューリック夫人で、女學校を援けたのは O. H. ギューリックの妹のジュリア・ギューリック女史 (Miss Julia Gulick) で

ある。

- 4) 来日時の年齢について、本項註 2) 参照。
 - 5) 校名を「英和女学校」とした時期については、『神戸女学院百年史 総説』pp. 63-64. の考察を参照されたい。
 - 6) ダッドレー女史は来日時には32歳3か月。晩年は1901年1月帰米、1906年7月12日カリフォルニアにおいて帰天。
 - 7) 宣教師志願の時期については、本誌第4号「イライザ・タルカット女史略年譜」参照。
 - 8) 「タルカット・ダッドレー」は「タルカット、ダッドレー」
 - 9) 女史の経歴における年月日および年齢については、本誌前号の略年譜にて確認されたい。
- また、神戸到着は3月31日である。
- 10) 女史の帰国は1896年2月。
 - 11) 年齢については本項註 2) 参照。また「神戸ホーム」については、本項『めぐみ』註 7) に同じ。
 - 12) 校名変更の時期については、本項註 5) に同じ。
 - 13) 創立当初の校名に関しては、本項『めぐみ』註 7) に同じ。
 - 14) 女史来日時の年齢、校名に関して、それぞれ、本項註 2), 5), 11) に同じ。
 - 15) アメリカン・ボード宛ての第一信は4月12日附(「神戸女学院学報」次号4頁においては12日とされている。), アメリカにおける最後の手紙は1月28日附であった。
- また、女史のサンフランシスコ出港は3月1日で、タルカット書簡によれば、一行は26日間の船旅ののち横浜に寄港し、3月31日朝「大阪湾」に入った。この船旅の日数については、稿を改めて述べる(本誌 p. 27.)。
- 16) ケケンッド館はケンウッド館。誤植。
 - 17) 「立札」に記されている「ジョン・C・

ベユリイ」とは John Cutting Berry のことである。Berry の仮名標記は通常「ベリー」であって、上の如きものは他に例を見ない。

- 18) 学院史上「英語学校」と称せられるものが「はじめに」タルカット、ダッドレー両女史によって「創立」されたという記録はない。

また「神戸ホーム」に関しては、本項『めぐみ』註 7) に同じ。

- 19) 「神戸ホーム」について、同上。

また、女史が日本帰任を意図して米国を発ったのは明治33年であったが、その途上ハワイに立ち寄って日本人伝道に従事したもので、神戸帰着は明治35年のことになる。

- 20) 年齢は数え年になっている。
- 21) 「神戸ホーム」について、本項『めぐみ』註 7) に同じ。
- 22) 同上。

*) 凡例にも述べた如く、百周年記念建築物のうちタルカット女史の名を冠した一棟への言及である。

The History of Kobe College

- ☆ 1950年に神戸女学院創立75周年を記念して出版された英文の学院史。著者はシャーロット・B・デフォレスト名誉院長。A 4 版で本文 222 頁、附録 30 頁。本文は全18章から成り、その構成は以下の通り。
- A) The Pre-College Era, 1-5 章
 - B) The College Era,
 - (1) Under American Leadership, 6-10 章
 - (2) Under Japanese Leadership, 11-17 章
 - C) The Alumnae, 18 章
- 第12章までは1946-47年にアメリカで米国伝道会の文書その他を渉猟して、残りの部分は1948-50年に日本で教職員や

同窓生間に資料を求めて、書かれた労作である。

- 1) 本書に初登場のタルカッ女史は、“a straight, upstanding but modest New England woman of thirty-seven,”と紹介されている。但しこれは冒頭の叙述によって1873年10月以降のことと考えられるので、他の多くの記述に見られる如く「37歳で来日」ということにはならない。

- 2) 4月12日附のタルカッ女史の報告とは、米国伝道会宣教師文書(1871—1880)中のタルカッ書簡313号である。

なお、この項において横浜までの航海日数を26日とするのは上の書簡に據るが、このことに関する考察は別稿に譲る(本誌 p. 27.)。

“After a few hours in port, it sailed on to Kobe.”は上の書簡の“We... had consequently but a few hours for a call at Mr. Loomis and Mrs. Pruyne...”に対応するものと見えるが、女史が横浜で船を乗りかえたのでなければ、女史の乗った船は3月29日に横浜に入港、翌30日に最終目的地香港を目ざし出港している。

- 3) 前田兵藏方に私塾を開いた時を1873年11月とし、これは1874年の *Annual Report* (A. R. と略す。) p. 60. の報告と符合する。但し1874年6月20日附ダッドレー書簡71号には「昨年10月に小さな学校を開きました」という一節が見える。

タルカッ女史の12月の記述については出典未詳。

- 4) 1874年5月の女史の記述は、タルカッ書簡315号(5月16日附)の一節。
5) グリーン師による年次報告のこの部分は A. R., 1874, p. 60. に掲載されている。

家政担当宣教師についてのタルカッ女史の陳述は、タルカッ書簡317号

(1874年8月7日附)からの引用である。

- 6) この部分冒頭は米国伝道会本部における「女学校」設立認可票決のいきさつを明らかにするものであるが、これには続けて次のような説明が加えられている。“A vote like that shows why the school started by Miss Talcott and Miss Dudley was spoken of in the Mission for several years as the “Kobe Home”. 但しこのことは、創立当初の「女学校」が掛けに「神戸ホーム」と称したことの証左とはならないであろう。創立当初の学校名に関しては既述の如く『神戸女学院百年史 総説』pp. 46—48. 同じく『各論』pp. 3—4. の検討考察を参照されたい。
7) 1875年夏の女史の記述は、タルカッ書簡319号(8月4日附)の一節。
8) 新築の校舎についての女史の説明はタルカッ書簡320号(1876年10月18日附)による。但しこの手紙によれば「居室は全部で11」とのことであるが、本書以下全ての学院史においては13と紹介されている。
9) 神戸在住の生徒に関する報告はタルカッ書簡322号(1877年8月7日附)の一節。
10) 学業に関する女史の報告はタルカッ書簡320号の一節。
11) 1876年10月の女史の報告(二件の結婚問題をめぐって)はタルカッ書簡320号による。
12) バロウズ女史の来日について、同上。
13) この問題に関しては『神戸女学院百年史 総説』pp. 57—62. および「クラークソン書簡一訳および註」(本誌第1号〜第3号)を併照されたい。但し本書 p. 12. (左) に引かれたクラークソン書簡中の“I have been obliged to trouble Miss Dudley.”なる一節(148号, 1878年2月21日附)の解釈は「クラークソン書簡一

訳および註」によるのが妥当であろう。

- 14) ここに引かれた1880年6月1日附のクラークソン書簡と言われるものは原文のままではなく、著者の手によって文章の並べ換えが行われている(クラークソン書簡153号参照)。
- 15) カリキュラムの構成(p. 14.)および校名の変更(p. 15.)に関しては、『神戸女学院百年史 総説』pp. 62-66. における検討考察を参照のこと。
- 16) この間に米国伝道会本部に報告を送っているのは妹のマリア・タルカッタ女史で、その書簡は姉のその後の書簡と共に納められている。
- 17) タルカッタ女史のアピール(引用文はp. 23. (右) にわたる)は、1886年9月7日附、比叡山で書かれた“To the Christian Women interested in the Work of the ABCFM.”と題するもので、タルカッタ書簡267号として整理されている。
- 18) 神戸女子神学校に関する言及である。
- 19) 創立者記念日についての説明。ここでは英文の常で、終始“Founder's Day”と言う。
- 20) 1917年5月22日、創立記念日記念文学会において「タルカッタ女史の一代」と題する芝居が上演されたとの記録とその台本(一部散佚)が残っている(本誌第4号 p. 8. 参照)。
- 21) 学院の祝日として、5月22日にかわり10月12日(寄宿学校開校の日)が公式のものとなったことを告げる。
- 22) 「神戸ホーム」という呼称については、本項『めぐみ』註7)に同じ。

神戸女学院八十年史

☆ 1955年(昭和30年)の創立記念日(10月12日)を期して上梓された邦文の学院史。著者は和島芳男教授。本書は単なる通史とは少しく趣きを異にして、「まず総説

で学院八十年の歴史を概観し、次に五章にわたって学院史の重要事項を各方面から分析する方針に拠る」昭和30年6月30日までの事実を記述する。A 5版で本文332頁と附録及び写真。章だては、総説 八十年史の概観／第一章 維持管理／第二章 教育方針／第三章 学校組織／第四章 敷地建物／第五章 学院生活。編集委員長・難波紋吉院長。

- 1) 1頁—タルカッタの英字標記はTalcott. 『神戸女学院八十年史』表紙裏に添附の正誤表に記載の通り。

2 頁—タルカッタ、ダッドレー両女史の着任時の年齢は数え年である。

4 頁。註②—京都転任は明治23年秋、神戸女子神学校復帰は同36年以降(33年にハワイに赴き35年12月まで該地に滞在)である。

- 2) 119, 120頁—創立記念日と創立者記念日との関係について説明されている。
- 3) 154 (158) 頁—「七—雑報」原文は「右女学校 タルカッタ ダツレー」であった。またこの時期に「女学院」という呼称があったという史料は未見である。(なお、横川四十八著「偉人タルカッタ女史」にも同じ広告文の引用があり、「右女学院 タルカッタ ダツレー」と結ばれている一本誌 p. 11. 参照)。後代の先入主によるものであろうか。)

155頁—クラークソン女史による新課程の実施および校名改称のことに關しては、『神戸女学院百年史 総説』62頁以下に新しい考察が見られる。

- 4) 322 頁—タルカッタ書簡によれば、神戸到着は3月31日である。

326頁—「永眠七十六」とある。但し本文4頁の註②においては、「七十五歳で永眠するまで」と、満年齢が用いられていた。

神戸女学院百年史 総説

- ☆ 創立百周年記念出版物の一。創立101年目の1976年(昭和51年)10月12日に発行された編年体の学院史。神戸女学院創立の母体となった米国伝道会の日本伝道開始から説きおこし、百周年記念式挙行の時点の学院の状況を記して結ぶ。A 5版、本文470頁、略年表を含む附録31頁及び写真。章だてと執筆者(敬称略)は、第一章 草創の時代/第二章 創業の時代(以上、鈴木恒彌)/第三章 試練の時代/第四章 充実の時代/第五章 発展の時代(以上、和島芳男)/第六章 受難の時代(三木俊秋)/第七章 復興の時代/第八章 拡充の時代(以上、長 洋一)/第九章 学院の現状(渡辺久雄)。監修・和島芳男、編集・渡辺久雄。
- 1) 19、20頁—デイヴィスによる米国伝道会宛て抗議の書簡(同年4月15日附)には、「タルカッタ女史は、伝道団が彼女を予期していなかったこと、そして彼女の住居のためとして何ら特別な準備ができていなかったことを知らざるを得ませんでした。当然のことながら女史は、みじめな、多少とも気の滅入る(a little blue)思いをしたのであります」との一節がある。詳しくは別稿(本誌 p. 27.) 参照。
- 2) 43頁—デフォレスト女史は*The History of Kobe College* を書くにあたり、米国伝道会の生史料を渉猟したという。従ってアッキンソン報告の未公開部分もこの時に見い出されたものであろう。
- 3) 73頁—神戸で永眠したタルカッタ女史は春日野の外人墓地に葬むられたが、50年後の1961年、神戸市の都市計画に従って再度山修法ヶ原に移葬された。
- 4) 207頁—創立(者)記念日については、*The History of Kobe College* p. 137, p. 178, 『神戸女学院八十年史』pp. 119-120, 本書 pp. 141-142. 参照。

- 5) 417頁—S.L. ギューリック夫人カーラ・フィッシャーがタルカッタ女史の姉 G. M. フィッシャー夫人の娘であった。従って女史はリーズ・ギューリックの大叔母ということになる。(本項『めぐみ』註 3) 併照。)
- 6) 452頁—タルカッタ記念館については、「神戸女学院学報」69号 pp. 1-3. 参照。

神戸女学院百年史 各論

- ☆ 学院百年史の別冊として企画され、総説に遅れること4年半の1981年(昭和56年)3月12日に発行された学院史関係論稿集。A 5版で本文684頁年表16頁。三部構成。「わが国の女子ミッション・スクールの一典型としての神戸女学院像を明らかにすることを第一部とし、また、このようなミッション・スクールにおける学生キリスト教運動の流れと、神戸女学院の英語教育についての論稿を第二部に、そして神戸女学院の文芸活動に関わる諸論文と、讃美歌についての論稿を第三部に配して」(p. 706.) いる。執筆者(敬称略)は、第一部・溝口靖夫、高道 基、岡本道雄、武田清子、山口光朔。第二部・本城智子、藤森 元。第三部・辻橋三郎、山内祥史、吉村 稠、井嶋 悠、山口君子。編集・岡本道雄、伊藤卓二。
- 1) 6頁—タルカッタ女史の名 Elisa は誤植。正しくは Eliza。
- 2) 83頁—京都赴任は明治23年秋のことである。
- 3) 132頁—*Life and Light* の記事は女史の妹ローラの筆になるものであるが、これが掲載された時、女史はなお九州宮崎に赴き伝道活動に従事していた。
- 134頁—ミス・ポーターズ・スクールにおけるタルカッタ女史の姿について、妹ローラは次のように記している。“When educational privileges were desired,

she was sent to Miss Porter's School in Farmington, where she showed such a clearness of intellect and executive ability that Miss Porter asked her to prolong her studies and act as pupil assistant. This arrangement most happy in bringing her into close relation with Miss Porter, was suddenly ended by her mother's death; but the experience had given her a desire to fit herself, through normal-school training, for work in that line and in course of time she entered the New Britain Normal School." (L. E. Learned, *Eliza Talcott*, PIONEER SERIES, p. 1.)

137 頁—タルカット、ダッドレー 両女史の年齢は数え年である。また引用文の部分に「パシフィック号」とあるが、ここは原文では Pacific steamership とな

っており、その船名は (*Japan Mail* の乗船者名簿によれば) "*Japan*" であった。

147 頁—女史の広島における活躍は 1895 年。1836 年 5 月生まれの女史、59/60 歳の時のことである。

4) 167 頁—神戸女子神学校の基がおかれたのは、1880 年秋のことであった。「女学校」のホームを出たダッドレー、バロウズ 両女史が「花隈に借家して六人の生徒で始めた」(本書 82 頁)もので、この頃タルカット女史は岡山に在った。タルカット女史が女子神学校と親しく関わりを持つのは、手元の史料によれば、1886 年の冬頃と 1902 年 12 月以降のことである。

5) 692 頁—タルカット女史の休暇帰米は、1896 年 2 月のことである。

694 頁—タルカット女史永眠の年齢は数え年である。

(若山 晴子)